八条宮智仁親王サロンの主要な活動と構成員

Main Activity and Member of Imperial Prince Toshihito Hachijou-ri-Miya Salon

町田 香*
Kaori MACHIDA

Abstract : I make clear character and existence significance of a Imperial Prince Toshihito salon at dawn of the Kanei culture from main activity and member of a salon so that early modern times early days Imperial Court garden cultural history positions existence of Imperial Princes Toshihito Hachijou-no-Miya aloft. As a result of I collected evidence of activity and a member of a salon from a handwriting of the Imperial Prince Toshihito and the inside of a diary class of the same period, and having compared it with "the Imperial Prince Toshihito annuals" that I could judge will of the Imperial Prince Toshihito to be reflected powerfully, the salon did an activity of composing a poem with the subject, and the original character that a renga poet Satomura family was a main member became clear. In addition, it was a member of the royalty, and this salon which the Imperial Prince Toshihito who was an aspect biography person of ancient and modern times instruction sponsored was able to point out the important significance that was existence to take a one axis of classic revival activity in the Imperial Court.

Keywords: Imperial Prince Toshihito salon, Composing a poem, Renga poet Satomura family, Classic revival

キーワード: 智仁親王サロン, 詠歌活動, 連歌師里村家, 古典復興

1. 背景と目的

八条宮初代智仁親王（以下、智仁親王）は、その生涯のうちに八条宮本邸庭園¹⁾、「瓜畠のかるき茶屋」²⁾という主に二つの庭園を生み出した。しかし、これらの庭園は庭に直結する具体的記述を示す史料に大きな制約があることから、庭園史上において智仁親王の位置付けや、その存在意義を明確にするには困難な現状にあるといえる³⁾。

一方、近世初期宮廷庭園文化は、主に仙洞御所や修学院離宮における後水尾院サロンの活動を中心として論じられ、時代的には寛永期以降に比重が置かれている⁴⁾。その中で智仁親王は桂離宮の創始者として位置付けられるために、寛永期以降の庭園文化論にその存在が吸収され、智仁親王の生きた慶長・元和期という時代性が曖昧に扱われているといえる。

本論では、近世初期宮廷庭園文化史上に智仁親王の存在を位置付けるために、寛永文化の黎明期における智仁親王サロンの性格・存在意義を、サロンの主要な活動と構成員から明らかにする。

2. 智仁親王サロンに関連する史料の評価

智仁親王は、正親町天皇の第一子である陽光院誠仁親王の第六子として天正七年（一五七九）に生まれ、後陽成天皇とは同母弟である。天正十六年（一五八八）頃に豊臣秀吉の猶子となり、その後秀吉に待望の実子が生まれたために猶子縁組を解かれ、天正十八年（一五九〇）に秀吉によって八条宮家が設立された。元和年間から自ら「瓜畠のかるき茶屋」と呼んだ初期桂離宮の造営に着手し、寛永六年（一六二九）に薨去した際に桂光院と追号されたことから、桂に象徴された生涯を送った。

智仁親王サロンの活動と構成員を把握するために、智仁親王の主な自筆日記類『智仁親王御記』⁵⁾（以下、『御記』）、『智仁親王日記』⁶⁾（以下、『日記』）、『智仁親王御年曆』⁷⁾（以下、『御年曆』）、及び同時代の諸日記類から、八条宮本邸および「瓜畠のかるき茶屋」にて催された活動を抽出すると共にその頻度を集計した。

智仁親王自筆の『御記』は慶長四～七年、『日記』は慶長八、九年のうち数ヶ月程度、また『御年曆』は慶長元～元和六年にお

ける特記事項のみの記述であることから、生涯にわたって平均的なデータを集積することは困難である。よって、智仁親王に関する記述が特に多く見られる『時慶卿記』、『鹿苑日録』、『御ゆとのうへの日記』などを併用した⁸⁾。また、取り扱う年代はサロンらしき活動の記述が現れ始める慶長元年から智仁親王の薨去する寛永六年までに限った。史料の性格や年代に偏りがあるのは免れず、サロン活動や構成員が詳細に記述されていることは稀であるが、本論の主軸となるサロンの主要な活動と構成員については、収集したデータから概ね明らかになる。

また『御年曆』は智仁親王自身が日記をもとに後に編集したものであり⁹⁾、それぞれの年において前半部が主に智仁親王の詠歌活動、後半部にはその他、社会時勢など関心事の記述がまとめられている。この『御年曆』に関しては、婚儀などが省かれているために重要な記述が欠落しているとの指摘もあるが¹⁰⁾、智仁親王自身が人生の後半になって自分の生涯を振り返ったときに、あくまで自分の意志で抽出したものであるから、ここに記された事柄の意味は大きいと考えられる。また、記述内容は偏りが大きく、その点に智仁親王の強い意志を感じ取れる。つまり、ここに智仁親王が自ら深い関係を持ったメンバーが集約されるともいえる。従って、本論ではこの『御年曆』を重要視する姿勢を取った。

3. 史料の集計結果と分析

（1）智仁親王サロンの主要活動

全史料による智仁サロンの活動種別と頻度は表1のように集計された¹¹⁾。

表-1 全史料におけるサロン活動の集計

詠歌	153	外遊	16
講釈	44	花見	12
能楽	29	数寄	12

この結果から、サロンは詠歌活動が中心であったことが明らかである。しかし、上記の行為はいずれも単独でなされるものでは

*京都造形芸術大学大学院芸術研究科

なく、花見の際には歌会があり、また酒を飲み、踊りを鑑賞するなどしていたことは当時の宮廷文化生活の諸相から明らかである。

また、詠歌活動をさらに詳しく分類すると表2のようになり、連歌会が多く催されていたことが解る。

表-2 全史料における詠歌形態別分類集計

連歌会	77	和歌会	33
和漢・漢和会	35	詩歌会	12

一方、智仁親王自身にとって特に思い入れがあった活動を抽出するために、『御年暦』中の記述を同様に種別・頻度ごとに集計した結果、表3のようになった。

表-3 『御年暦』におけるサロン活動の集計

詠歌	159	講釈	19
外遊	30	時事	12
能楽	20	参詣	8

智仁親王自らも自身の詠歌活動を記述することに比重を置いていることは明らかであり、その詠歌活動を分類し集計すると、

表-4 『御年暦』における詠歌形態別分類集計

連歌会	80	和漢・漢和会	22
和歌会	36	詩歌会	5

という結果が得られ、サロンの中心であった詠歌活動の中でも、とりわけ連歌会を執拗に記述していることから、智仁親王自身が連歌会を好んで行っていたことがうかがえる。

(2) 智仁親王サロンの主要構成員

智仁親王サロンの活動の中心が詠歌にあり、特に連歌会を好んでいたことが明らかになった。ここでは智仁親王の交友圏を鳥瞰し、智仁親王と繋がり強い人間関係を抽出するために、(1)と同様の方法で活動参加者を頻度集計した。全史料の集計結果は表5、『御年暦』の集計は表6のようになった。

表-5 全史料におけるサロン参加者の頻度集計

听叔顯暉	73	文英清韓	12
里村昌琢	45	玉甫紹琮	12
里村玄仲	25	細川幽齋	11
興意法親王	13	佐野紹由	11

表-6 『御年暦』における記述頻度集計

里村昌琢	56	細川幽齋	15
里村玄仲	26	里村玄仍	11
良恕法親王	20	中院道勝	10
興意法親王	16	佐野紹由	10

特徴として連歌師里村家ならびに皇族兄弟の名が頻出していることから、彼らがサロンの主要な構成員であったことがわかる。

4. 智仁親王サロンの主要構成員とその関係性

表5において相国寺僧の听叔顯暉をはじめ五山僧の名が目立つのは、『鹿苑日録』において八条宮邸における漢学の講釈会が詳細に記述されているためである。当時禁裏を中心に、これら五山僧の講釈会が頻繁に行われており、宮廷の古典復興活動の一助となっていた。智仁親王と特に関係が深かったのは听叔顯暉や有節瑞保などの相国寺僧であり、サロンの構成員であったといえる。また、表6において、上位四名のように智仁親王と同世代である

場合は頻度が高くなるのは必然であるが、その中でも頻度に差があることに、智仁親王自身の意志が現れているといえる。一方、頻度の低さが必ずしも智仁親王との関係の薄さを現しているわけではない。智仁親王に古今伝授を行った細川幽齋をはじめ、中院道勝、道澄准後は智仁親王の青年期の歌道師範であった¹²⁾。智仁親王の教養の礎を築いたことから、その存在を見逃すことはできず、智仁親王の幼・青年期における教養の育成はこれら戦国期に生きた人々によってなされたということは、大きな時代的背景として特記しなければならない。これらの人物と智仁親王の関係性を考察する必要があるが、本論ではデータから主要な構成員を見出すことに留め、今後の課題としたい。

(1) 皇族連枝

良恕法親王は智仁親王の五歳年上の兄で、曼殊院門跡第二十八世である。曼殊院で月次歌会を催し、その歌会に関しては越智に詳しく¹³⁾、曼殊院が北野天満宮の別当職を相承する寺であることから、歌会は北野大自在天神菅原道真への法楽として行なわれた。智仁親王の日記には、この歌会が「竹門跡聖廟御法楽御月次」と記されており、頻繁に出席していたことがわかる。良恕法親王の歌会の主要な構成員とされる皇族・門跡は智仁親王サロンとも重なり、良恕歌会における智仁親王は、古今伝授の相伝者として会に重厚さを与え、指導的立場にあったと指摘されている¹⁴⁾。

また、良恕法親王と共に智仁親王と親密であった興意法親王は、聖護院に入室した後に、照高院を継承した。興意法親王に関してはその動向が明らかになっておらず、智仁親王サロンにも良恕法親王のサロンにも参加していたが、独自のサロンを擁していたかは不明である。

(2) 慶長・元和期における宮廷の古典復興

智仁親王をはじめとする皇族・宮門跡の生きた時代は、戦国末期の動乱の中からようやく織田信長、豊田秀吉、徳川家康と天下統一の気運が熟し、やがて徳川幕府の基礎の固められてゆく時期にあたり、いわば中世から近世への過渡期の真只中であつたことは周知の通りである。天正年間には宮廷が秀吉の保護を受けて立て直しをはかった時期であり、戦国期に衰微していた宮廷の土台は、古来から公家が担っていた古典教養の復興にも表れていた。宮廷における古典復興活動は後陽成天皇を頂点に、智仁親王をはじめ良恕親王などの皇族が、それぞれの独自の性格を持った歌会などを催すことによって実行していた。また、それら宮廷人を町衆や連歌師などの地下がその周辺から支持していたという状態が近世初期特有のものであり、それが寛永文化の特徴であったことは言うまでもなく多く論じられている¹⁵⁾。八条宮家に入内していた町衆には表5、表6中に見られる佐野紹由がいた。紹由は紺染に使用する紺灰を扱う豪商灰屋であり、当時茶屋・角倉・後藤などの諸家と比肩していた。紹由に連歌を学び昌琢と親しく、彼の媒介で堂上と交流をもつことになった。灰屋は二代にわたって八条宮家との関係が続いた。

後陽成天皇は在位中から時世の推移を洞察し、特に古典文学に精通し、『伊勢物語愚案抄』二巻を著した。また朝鮮より活版が伝来したのを好機に『日本書紀神代卷』『職原抄』など、いわゆる慶長勅版本を刊行した。さらに、後陽成天皇は戦乱によって停滞していた宮廷儀式の復興にも力を注いだ。『梶召除目』『殿上淵酔』などといった儀式が慶長年間に復興されたが、経済的な面からも継続して行うことができずに、再び滞り、寛永期に入って後水尾天皇によって再興されるという不安定な状況にあった¹⁶⁾。そういった時流からも古典復興は、戦乱による宮廷儀式の停滞、生活様式の忘却などからうかがえるように喪失していた宮廷という集团的アイデンティティの復興・確立でもあったといえる¹⁷⁾。

(3) 智仁親王と里村家

表5、表6共に、里村昌琢(以下、昌琢)が群を抜いて頻出し

ていることがわかる。また昌琢以外にも玄仲、玄仍といった連歌師里村家の者の名を智仁親王が執拗に記述していることは注目すべき点であり、智仁親王と連歌師里村家との親密さがうかがえる。

一方、里村家の活動の拠点が慶長年間には豊国社会所と八条宮御所、豊臣氏滅亡以後は八条宮家と幕府御連歌にあり¹⁸⁾、里村家側からも生涯に渡る八条宮家との交流が裏付けられる。

それでは里村家はどのような経緯で八条宮家との接触をもつようになったのであろうか。里村家の祖師は里村昌休（以下、昌休）であり、昌休の弟子である紹巴は昌休が早死したためにその子息昌叱を養ひ里村家を継いだ。智仁親王に近侍していた昌琢は昌叱の子で里村南家を設立し、里村玄仍、玄仲は紹巴の子で、里村北家を設立した。昌休、紹巴は連歌師として豊臣秀吉などの歌会に度々召しよされておられ、そのメンバーには細川幽齋や道澄准后などといった、智仁親王の幼年、青年期の歌道師範にあたる者たちであった。恐らくこういった流れから紹巴は宮廷人と関係を持ち、徐々に足場を固めていく里村家は八条宮家と関係をもつに至ったことが推測される。

連歌師は「職人・町人出身者でも貴人と立ち交わることができる。」との紹巴の言葉に象徴されるように、当時生計を得る方法として連歌師になるというルートがあったのである¹⁹⁾。連歌師と貴人との人間関係を支えている基盤の一つは、連歌師の貴人に対する様々な奉仕であり、文芸と実務のバランスの上に成立している。奉仕と師承の関係は、すぐれて連歌師独自のあり方を物語っているとされている²⁰⁾。連歌師独自のあり方とされているこの奉仕と師承の関係は明らかに智仁親王と昌琢にも見てとれる。昌琢は智仁親王に連歌はもちろん、源氏物語の講釈を行い、また智仁親王の江戸下向などことあるごとに供をし、心をなごませたりもしている。

智仁親王と昌琢の接触の初見は慶長二年（一五九七）にあり²¹⁾、以後その名は通常的に表われるようになり、智仁親王の亡くなる寛永六年まで親交は続く、またその後も昌琢は智忠親王の歌道教育を、智仁親王の遺言通り行い、生涯八条宮家と強い結びつきを続けた。

良恕親王の歌会と智仁親王サロンには構成員の重複が見られるが、本人の立場だけでなく、思想によってもサロンの性格や在り方において相違があることは必然であり、それが、それぞれのサロンの主体的特質ともいえる。智仁親王のサロンには連歌師里村家と皇族兄弟である良恕法親王などが主要な構成員であったことが明らかになった。昌琢などは、下級公家や武家、社家とも連歌を通じて幅広い交流をもっていた。禁裏においても連歌会は和歌会と同様に頻繁におこなわれており、連歌の担い手としての活躍の場が開かれていたのである。

（４）里村昌琢から見た「瓜畠のかるき茶屋」

智仁親王は連歌を好み、連歌師を慕ったが、智仁親王にとっての連歌と庭園にはいかなる関係性にあったのだろうか。

次の智仁親王薨去に際して昌琢の綴った哀悼文は、智仁親王と昌琢の精神的結びつきを察して余りある。昌琢にとっての智仁親王、桂での想い出はこう綴られている。

（上略）まことにもろこしのふかき道までも学ばせ給ひてなにはの事も明らけきやまとたましいの御身にて、花紅葉月雪の折りには、詩歌、聯句、和漢、連歌などもよほさせ給ひて、其道々のともがらをめしよせて、昼はひねもす夜はよすがらの御遊絶えず、又下桂に別業をかまへさせ給ひて時に付けたる花の木草を植えさせ、一かたには狛のわたりをもうつさせ給ひて三伏しの夏いとあつきころをひ、人々あつめ御前にて御肴などを調ぜさせ給ひて、流に盃を浮べ石上に詩を題しうたをつらね、あけのうほ船をさし出棹の歌に心をやりしも、日暮ぬれば都

にとかへり侍るをしたはせ給ひて、川づらちかく送り出させけんをすすめ給ひしも

如夢幻泡影如露亦如雷矣（下略）²²⁾

まずは前半部によって智仁親王がいかに様々な詠歌活動を貪欲に行っていたかがうかがえる。そして、その後に続く「時に付けたる花の木ぐさを植えさせ」とあるように、第一に時節の花や樹木を植えるという季節感が庭の景に求められた。また瓜の名産地でもあり、源氏物語の「紅葉賀」的一幕をも連想させる狛の渡りをうつしたことから「瓜畠のかるき茶屋」と銘々した智仁親王と源氏物語の親密さがうかがえる。桂における遊興の事跡は数件しかなく、史料の制約はあるが「三伏しの夏いとあつきころをひ」という言葉に現れているように、主に旧暦六月という猛暑の時期が印象深かったようである。また智仁親王は特権階級であっても自身の身分を誇示するわけではなく、身分差を越えて、様々な職能を通じて諸権門に奉仕する存在である「道々のともがら」を召し寄せ、その空間を我がものだけとはせずに、人々と共に王朝世界に興じていた。後陽成天皇の目指した宮廷・公家の和歌の興隆において、地下は対象外であったという指摘もあるが、智仁親王サロンから見れば、地下をも含有した和歌の興隆を智仁親王自身は目指していたといえる。貪欲に諸学問を学ぼうとすれば、身分に関係なく教えを請うことを望んだと考えられる。和歌を主体としたサロンであれば、智仁親王は屈指の指導者であったが、連歌は連歌師、和漢であれば僧侶などの指導的立場の者が必要となってくる。

連歌は室町期を中心とした会所文化の中で発展したもののだが、智仁親王が連歌を好んだ背景には、室町後期からの連歌隆盛という文化的状況があった。智仁親王の連歌に対する思い入れの一面には、常に気の合う仲間と歌の心を連ねること、即興性、連続性という連歌の持つコミュニケーションの在り方があったとも考えられる。そういった性格をもつ連歌によって、和歌の面白みが一層増してくるものであった。和歌の最高権威である古今伝受を担った智仁親王であるからこそ、和歌を幅広く扱え、より和歌の面白さが得られる連歌という、詠歌形態を中心としたサロン活動がなされたといえよう。古典文芸復興の気運の中で、智仁親王サロンが連歌会を主体としことにより、宮廷内での連歌師の足場が固まり、後の後水尾院サロンにおいて、確かな基盤をもって存在するようになっていくと考えられる。

５．智仁親王の詠歌と庭

智仁親王は詠歌を主体とした生涯を送ったが、智仁親王にとっての詠歌という行為と、庭園とはどのような関係であったのだろうか。

寛永元年（一六二四）八月十五日、完成した「瓜畠のかるき茶屋」にて中秋の名月の日に歌会が催された。

わか志るよし志て侍りつるに一亭をたて折々住侍つるに八月十五夜なればをろかなる心を筆にまかせて書きつけ侍るもの也と詞書きして

一枝をおる身ともかな月の中の

かつらのさとの居住なせば²³⁾

など十首余りを智仁親王は詠んだ。「和歌を志すために一亭を建て折節に住んでいます。今宵は八月十五夜ゆえに、未熟な私の心を筆に任せて書きつけます」と詞書きの後「桂の里に住居ができあがったので、私はこの桂という月の世界に身を隠したいものだ」と詠んだ。智仁親王はこの年四十六歳、五十歳寿命の当時としては、もはや晩年にあたる。死を見つめる時期にあって、和歌の精進のために、「瓜畠のかるき茶屋」を構えた。そして、隠居して月の桂の里で、静かに歌に心を傾けたい・・・と願う智仁親王の心情が表現されている。

このように智仁親王の全てともいえる歌の根源的意味は、関ヶ原の合戦の最中に歌道師範である細川幽齋から受け継いだこの一首の歌に集約されるといえる。

いにしえも今もかわらぬ世中に

心のためをのこすことの葉²⁴⁾

智仁親王は和歌を志すために「瓜畠のかろき茶屋」をつくった。多大な和歌の教養をもった智仁親王にとって庭の草木や花には、和歌から生まれ出るイメージが重層されていた。「花見当座」などの記述は頻繁に見られ、庭は歌の場として必然的に存在するものであった。詠歌を主体とした宮廷人だからこそ、庭と歌は同じ意味を持っていたといえる。そして、皇族として、また古今伝授の相伝者として宮廷の古典復興の主軸であった歌道活動の中心の一人であった智仁親王は、いにしえから脈々と受け継がれてきた和歌の本質である「こころのたねをのこすことの葉」の継承と保護という役割を担い、智仁親王サロンにはその志を同じくする仲間たちが集ったのである。

6. まとめ及び今後の課題

智仁親王サロン活動の中心が詠歌にあり、中でも特に智仁親王が連歌を好んだことから、サロンの特徴的な性格として連歌会が主体となっていたこと、また皇族兄弟及び連歌師里村家がサロンの主要構成員であったことが指摘できた。

皇族兄弟が主要な位置を占めているのは、皇族という立場において宮廷の古典復興活動とその中心にあった、いにしえから脈々受け継いできた歌の心である和歌の隆盛のため、それぞれが詠歌活動を中心としたサロンを形成しながらも互いに支え合っていたためといえる。そういった宮廷人たちを周囲で支えたのが、当時戦乱期に発展してきた連歌師や町衆を始めとする地下であった。

智仁親王は、特権階級にあっても連歌師などの地下人と仲間という目線でつき合うという、身分格差を越えた人間関係の繋がりを大切にし、それゆえに歌の心を連ねる連歌を好み、また連歌師を慕っていたといえる。

以上のように智仁親王サロンの主要な活動と構成員を抽出することによって、その性格と存在意義の一端を明らかにすることができ、同時に庭園はサロンの活動の場であると共に、智仁親王にとっては和歌という「ことの葉」によって受け継ぐことができる「こころのたね」を育む場という意味があったことを浮かび上がらせることができた。

慶長・元和期における後陽成天皇を頂点とする宮廷の古典復興活動は、智仁親王や良恕親王といった皇族が、それぞれ独自の性格・構成員を擁したサロン活動を展開することによってなされていた。しかし、寛永期以降における後水尾院サロンは、前時代の皇族サロンの各役割を包含する総合的な存在となり、世代交代の中で宮廷における古典復興活動は変質していくことになる。

近世初期における宮廷の古典復興活動の中で慶長・元和期におけるサロンから、寛永期以降の後水尾院サロンへ移行していく過程の中で、サロンの性格・存在意義の変質を解明していくのが今後の課題である。それによって智仁親王サロンが寛永文化の形成に果たした役割が明確になり、近世初期宮廷庭園文化史上に智仁親王の存在を位置付けることができると考えている。

補注及び引用文献

- 1)『義演准后日記』慶長10年7月7日条「内裡御屋敷北方へヒロカリ、并院御所ヲ被建、御即位ノ御支度云々（中略）、八

条宮モ御屋敷替云々、是モ内裏ノ北方也」。とあるように、八条宮邸は慶長十年に屋敷替えがあった。ゆえに厳密に言えば八条宮本邸庭園は2つということになる。

- 2) 智仁親王自ら「瓜畠のかろき茶屋」と呼んだことから、その世界観を大切にするためにあえてそのまま使った。
- 3) 智仁親王個人に関しては、桂離宮の創始者として森蘿や久恒秀治によって文献から、智仁親王個人の教養の広さが述べられているが、庭園史上における位置付けは十分とはいえない。また、古今伝授の伝受相伝者というアプローチから小高道子によって研究が進められている。
- 小高道子（1980）：細川幽齋の古今伝授一智仁親王への相伝をめぐって：国語と国文学 57(8)等、本論は小高の業績に依るところが大きい。
- 4) 主に『隔葉記』寛永十三年の仙洞御所における口切り茶会が取り上げられている。
- 5) 宮内庁書陵部蔵。
- 6) 宮内庁書陵部蔵。
- 7) 宮内庁書陵部蔵。
- 8) より多くの事跡を収集するために『土御門泰重卿記』『本源自性院記』なども使用した。
- 9) 嗣永芳照（1973）：『智仁親王御年曆』：書陵部紀要 20, 93
- 10) 久恒秀治（1962）：桂御所：新潮社, 71
- 11) 表1にある各活動項目は、以下のような詳細をグループ化したものである。[詠歌：和歌，連歌，詩歌，和漢，漢和など]，[講釈：漢詩文の講釈など]，[能楽：能，囃子，謳など]，[外遊：本邸から出て行う遊びをこれに含んだ]，[花見：主に本邸におけるもの]，[数寄：飲茶もこれに含んだ]
- 12) (2001)：智仁親王詠草類三：宮内庁書陵部の解題において、これら三人による智仁親王の歌の添削状況が明らかにされている。
- 13) 越智美登子（1989）：曼殊院良恕法親王歌会をめぐって一後陽成、後水尾歌壇展開の一側面：国語国文 58(8)
- 14) 註 13
- 15) 林屋辰三郎（1953）：寛永文化論 中世文化の基調：東京大学出版会，349-359，熊倉功夫（1988）：寛永文化の研究：吉川弘文館 など。
- 16) 辻達也編（1991）：日本の近世2-天皇と将軍：中央公論社，155
- 17) 糸川千尋（2001）：桂離宮への精神史一智仁親王の『源氏之詞拔書』の位置付け：淡路景観園芸学校専門課程，平成12年度景観園芸デザイン課題制作演習。糸川は智仁親王自筆の『源氏之詞拔書』を翻刻し、智仁親王が源氏物語から抜き出した内容から、皇族としての思想、理想の生活様式、アイデンティティを源氏物語などの古典の世界に求めていたと指摘している。
- 18) 安藤 武彦（1987）：翻刻・宗因筆『昌琢発句帳』：園田学園女子大学論文集 21, 41-42
- 19) 奥田勲（1976）：連歌師一その行動と文学一：評論社，38
- 20) 註 19, 143
- 21) 福井久蔵（1969）：連歌の史的研究：有精堂出版，475
- 22) 宮内庁書陵部蔵『桂光院哀悼之文』。
- 23) 宮内庁書陵部蔵『智仁親王寛永元年八月十五夜詠歌十首』。
- 24) 宮内庁書陵部蔵『衆妙集』。新編国家大観第九巻（1991）：角川書店，17